

見極める力

～良心 or フィーリング～

ローマ 12:1~2

あなたが大事にしているペットが川でおぼれそうです。その隣で見知らぬ人もおぼれています。あなたはどちらを助けるでしょうか。これをアメリカで聞くと6割の生徒がペットを助けると答えるそうです。「ペットは大事だけど、あの人は知らないから・・・」こう答えるそうです。これを聞いてどう思いますか。こうなってしまうのは、私たち人間が「良心」ではなく「フィーリング」で生きるようになったからです。しかしミッション系の大学で聞くとほとんどの人が「人」だと答えます。理由は「人は神様がとても尊んで作った存在だから、神様の愛する者を助ける」だそうです。この違いは何なのでしょう。(ロマ12:1,2)

ゴスペルを歌っていて誰か一人が自分の声を張り上げてしまうと、そこには調和がなくなります。調和というのは自らのことをよく理解した人ができる唯一の技です。私たち人間の生活はこの「調和」が欠けてしまっているのです。憎しみや争いがあるのです。「自らが」という主張が物事のすべてを台無しにしてしまいます。私たちが今、生きている、その「存在」自体が多くのももの「犠牲」の上に成り立っていますがこのことをあなたは理解していますか。私たちは知らないのです。植物であれ生物であれ、それらを摂取し、私たちは生きています。自らで生きる力も持っていません。

「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」(ロマ12:1)

ここに出てくる、犠牲は、先の犠牲とは少し違います。「仕えてくれる人」というと、奴隷、下僕のような意味が強いです。本来は、日本の「奉公」という言葉に似ています。イスラエルにも奴隷制度はありましたが借金をした人が7年間だけ借金を返済するために仕えるというものでした。だからずっとではないはずですが、ずっと仕えます。それは「こんな素晴らしい主人についていきたい」という気持ちからです。これが本来の「しもべ」ということです。だから犠牲ではありません。イエス・キリストが自らで十字架に進んでいき、釘付けにされ、鞭打たれ、罪もないのに通った「死」を通して、人々が負っている「奴隷」という価値観を終わりにしました。だから私たちが「罪の奴隷」から自由にされ、「主人を愛して仕える」そんな礼拝者に造り変えられよということなのです。礼拝は、その中で、私たちの存在意義とアイデンティティを回復し、「主よあなたのしもべとしてついていきたい」、あなたが建てられるその国と一緒に見てみたい。」と願うのが私たちクリスチャンのしもべという概念なのです。

「わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべは主人のすることを知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです。」(ヨハ15:15) だからイエス様は私たちが「友と呼ぶ」と言ったのです。そして友には何でも伝える、つまり「家族」になった瞬間です。イエス様がしたことは、したくないことをしてしまう罪の奴隷から解放して新たな人生に生きることです。だから「この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何がよいことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」(ロマ12:2) これは私たちが友として本来の奉公人として仕える時に自らの本当の存在と良心が回復されていくということがわかります。両親が一人でも正しければ、その子の心は正しく育ちます。親の判断を見て子どもが育つからです。だから、この世と調子を合わせるのをやめて、神のみこころが何で、本来私たちが割られたときはどういうものであったのかを知って神に受け入れられるそんな存在に自分を作り変える決断をすることです。

今、あなたは物事をどのように判断しているでしょうか。冒頭の話でも「ペット」を選んだのだとしたら、良心が少しずつずれているかもしれません。見ている目線が物事を感覚で測るようになっていくからです。「自分の近くにいるものだから大事にする。」という概念は世界に戦争を引き起こしているのです。これが今の社会の大きな問題です。フィーリングとは「楽しいか、楽しくないか」「好きか、嫌いか」「得か損か」・・・こういった類のものです。そんなふうになっていないでしょうか。

アブラハムがイサクを捧げる時、神様はなぜ代わりに用意したのでしょうか。それはアブラハムがそれをいやいやながらにしたのではなく、神様が必ず備えてくださると信じて喜んで行おうとし

たからです。イエス様の十字架が素晴らしいのは「私たちを愛する」という一つの目的のためにそれをいやいやながらではなく喜んで行おうとしたからです。捧げ物とはそのようなものでなければなりません。しかし、今の社会はお金のために仕事をします。権利を主張しがちですが、聖書ではそうではなく、「義務」を果たすべきだとあります。私たちが生きた供え物としてささげられるためには、自らが今やっていることが本当に喜びのものでできているかを判断しなければなりません。「置かれた場所で咲きなさい。」こういわれる通り、私たちは今ある場所で咲く必要があります。私たちが今、生きるということに対して、絶えず「犠牲」があります。本来の犠牲ではなくいやいやしているので物事の脱線が始まるのです。礼拝も、奉仕も、祈ることも、いやいやながらであればやる意味がありません。それを行う理由は一つ、「彼が好き」だからです。

私たちがいつも妥協しようとしてしまいますが、妥協してはいけません。「調子のいいやつ」こういわれますが、適当にあしらうことではありません。私たちの良心に従ってどうすべきか判断していけばよいのです。

■ フィーリングで判断すると

敵か味方ができます。あなたの中に敵を作る習慣があるかないかを判断しましょう。特に自分の調子が悪くなったり、やましいものがあつたりすると人は敵を作ります。最初に敵を作ったのはアダムとイブの姿を見て育ったカインとアベルでした。弟のアベルは感謝し最良のものを喜んで捧げましたが、兄のカインは捧げものをする時に、「めんどくさい」ここから始まり、ずれ、結果、神様に喜ばれたアベルに対してカインが怒ったのです。神様ではなく弟を敵にし、殺したのです。「思うとおりにならない相手はいなければいい」これは殺人です。あなたに今、敵はいませんか。クリスチャンはその敵を、心の一心によって神の恵みによって愛そうとすることが大切です。それが神に喜ばれ、受け入れられることなのです。愛そうとする行動をとるときに、神様は愛する力を注ぐのです。敵をつくる・・・これが善悪の実の結果です。「あの人は」と言っている時点でその人を踏みつける寸前です。敵か味方ではないのです。もともと私たちは家族です。あなたがつなげば変わります。

■ 神の計画は神の視点に、礼拝と御言葉

御言葉は私たちを守ってくれます。御霊は必ず前もって私たちに語りかけ、備えてくれます。私たちは頭や目で見聞きする知識よりもよっぽど深いところで感じています。それが良心の恵みです。(エペ2:10~18)

「二つのものをひとりの新しい人に造りかえる」・・・国家間もあなたの職場も家族もそうなのです。相手ではなく「あなた」です。相手の出方に腹が立つのは自分にもそういうところがあるからです。私たちはその弱さを認めたくないので、相手を敵にしてしまいますが、十字架の恵みはあなたとその相手を一にししようとしています。一つにする方法は愛と赦しです。

御霊は私たちにとってはタックルを受けるような感じがしますが、それは反するからです。でも結果は振り返ってみると恵みであることがわかります。問題はこれができない私たちの「罪」です。「sin」(罪)「pride」中心に「I」自分があります。だから神様がそこにいない限り私たちは同じ失敗を繰り返し、判断を間違ひ、相手が間違ひた行動をとると自分を守るために相手を傷つけます。そんなとき神様は「私を真ん中に置き」と言います。すると変えられ、あなたがとった行動で相手が変わられます。「何がよいことで神に受け入れられるか心の一心によって自分を変えろ」変えるのは行動ではなく考えです。考えを変えれば決断ができます。静まるのが大切です。神様に出る礼拝をあなた自身がいけにえとなって出ることができれば、罪の真ん中にある自分がいなくなります。あなたの人生を一度置き、自分の敵だと思っている相手をイエスの御名によって愛しますと祈っていきましょう。

(要約者:岩崎 祥誉)

(2019年10月13日)